

清水克正教授のご退職にあたって

外国語学部長 石 川 輝 海

清水先生は42年間本学に在籍され、その間に本学の基礎固めと発展にご尽力をいただきました。誠にありがとうございました。先生のお姿を日常的にキャンパスで見られなくなり、大変寂しいのですが、今後も機会あるごとに、是非、顔を見せていただけますようお願い申し上げます。

さて、清水先生は、神戸市外国語大学外国語学部をご卒業後、国際基督教大学大学院教育学研究科へ入学されました。1967年にはフルブライト基金を受けて、イリノイ大学大学院言語学科へ入学され、1969年同大学院でM. A.を取得されました。そして、1970年本学経済学部助手として就任され、1972年専任講師、1975年助教授、1981年教授となりました。この間に京都大学大学院文学研究科博士課程（言語学専攻）に進学、次いでエディンバラ大学大学院博士課程（言語学専攻）に進学され、1991年同大学大学院でPh. D.を取得されました。

1985年外国語学部増設実行委員、1987年外国語学部開設準備委員として外国語学部の設立にご尽力され、その後1989年4月外国語学部設置により外国語学部英米語学科教授に異動されました。また、2003年外国語学部新学科設置検討委員長として、国際文化協力学科の設置にご尽力されました。2005年4月国際文化協力学科開設により、外国語学部国際文化協力学科教授に所属変更されました。1997年4月大学院外国語学研究科英語学専攻（修士課程）、2001年4月大学院通信教育課程外国語学研究科英語学専攻（修士課程）、2008年4月同（博士後期課程）の教授に就任されました。

その間、国際交換計画委員長、外国語教育研究センター長、大学協議員、国際交流センター長、外国語学部長、外国語学研究科長、入学センター長の要職を歴任されました。また、学校法人では、1991年より評議員、1997年より常任理事として大学の運営に携わられました。

研究面では音声学、英語音声学、および言語学を専攻され、アジアの諸言語の音声的特徴の解明、日英語の音声体系の比較・分析などを行われました。英語、日本語およびアジア諸言語の音声体系および音声的特徴の解明を主にご研究なさいました。平成22年度より日本学術振興会から科学研究費の助成を受け、「国際共通語としての英語の音声的特徴に関する研究」を中心に研究を進められました。著書12冊、研究論文88編の業績を発表されています。

学会関係では日本言語学会常任委員、日本音韻論学会理事、日本音声学会評議委員、大学英語教育学会中部支部副支部長を務められました。

教育面では「英語音声学」、「英語演習」などを担当され、コンピューターを利用して映像と音声とを有機的に結びつけた授業を実践されました。特に学生たちの英語リスニング・スピーキング力向上のために映像を主体にした教材を作成され、それらは学生たちに大変に好評でした。大学

院では「英語音声学研究」、および「英語音声学特殊研究」を担当され、「英語音声学論文演習」、および「英語教育学論文演習」の指導をなさいました。長きにわたり経済学部および外国語学部で多数の優秀なゼミ生を世に輩出されました。

清水先生は研究者として第一級の業績を上げられましたが、同時に教育者として大変温かく細やかに学生指導に当たられました。修学指導などの場で、清水先生の慈愛に満ちた言葉によって数多くの学生が救済されたと確信しております。〈自己には厳しく他者には寛容〉という言葉で文字通りそのお人柄において体现されました。

清水先生について思い出すことがいくつかございます。

清水先生は本学外国語学部を設置する際、中心になって働かれた先生のおひとりです。当時は大学が学部を新設するには2年間の時間と煩雑な様々な手続きが必要で、それらをすべて認可権を持つ文部省（当時）と打ち合わせする必要がありました。文部省はJR新橋駅から歩いてしばらくのところであり、2年間何度も通ったことを淡々とお話しされていました。文部省から指示される項目を確実にこなされて、初めて外国語学部の開設が実現し、そして私たちがこうして学生の指導にあたることができるわけです。

いつか講師控室かどこかでお茶を飲んでいて、話がある話題に及んだ時、清水先生が、「たいへんなことがあっても、みんなで知恵を出し合えばきっとなんとかなりますよ。」とおっしゃったことがあります。大学のことを考えると、本学は1970年代に財務危機に直面し、さらにこれから18歳人口の漸減という大学にとって難しい時代を通り抜けていくことになります。この言葉から感じられる清水先生の前向きな姿勢は、本学の未来を支えてくれるものと信じています。

最後に、私が清水先生に対して思うのは、筋を通す人であったということです。自分の意見が少数意見であることが分かっているにもかかわらず、必ず発言し、「少数派」に立つことを恐れない人でした。外国語学部が開設されてから四半世紀が過ぎようとしています。この間の教授会やその他の会議で、清水先生が実に鮮やかに持論を述べられ、私たちを勇気づけて下さったことを思い出します。

清水先生がいつまでもお健やかで、今後も言語に対する情熱を私たちにお示しくださることを心から願って止みません。